

【研究ノート】

ケネディ内閣の閣僚たち

——ホッヂスとデイ——

清 水 良 三

はじめに

いまではケネディは遠い昔の人となったけれども一九六〇年～一九六三年当時の日本の青年たちは大いに彼の人生を敬仰したものである。特に彼がその就任演説の中で国家と被治者との関係について、国家が人民のために何を為すかを考えるよりも、人民が国家のために何を為し得るかを考えよと述べたことは、国家のために大いなる犠牲を払いつつも敗戦という現実によって国家への忠誠心の否認を強制されていた日本人に、或る共通の感慨を与えたのである。国家への忠誠は必ずしも全体主義的な国家内での強制的な自己犠牲と連結するものではない。民主主義の祖国ともいうべき国の大統領が国家への献身の必要性を自由のカテゴリーの中で述べたことに、記憶の中で祖国への郷愁を感じていた多くの人々は自然な同感を経験した。これはかつて敵と味方としてたかたかた米国人と日本人の心理的同

調を可能にした。彼のこの演説によって日米間に伝統的に存在して来た友好感情が復活する一つの動機が与えられたのである。民主主義は余りにも内容が豊富で複雑であるために、適当な説明者がいないと、退屈極無他人の権力争いの芝居への、無責任的観客態度へ墮落しがちである。ケネディは少くとも退屈ではなかった。彼は魅力的であり清新の氣に満ちていたので、そういう彼の人格と深奥の底辺を有する政治哲学が、彼の周囲に多くの人材をひきつけたのである。私は既に国士館大学政経学会誌（現在廢刊中）や同大学政経論叢誌に、ケネディの補佐役として重要な役割を果した主要な閣僚の人物素描を何回か発表して来ている。詳細はそれらのバックナンバーに譲るとして、今回は商務長官ルーサー・ホッジスと郵政長官エドワード・デイの入閣前後の経歴とその他の特徴を述べることにした。人は集めるものではなく集まるものであるということが、これらの論説の背景を成す思想である。

一九八八年六月十六日

目次

- (一) ホッジスとデイの素朴な出発
- (二) 入閣までのホッジスの略歴
- (三) ホッジスの人物と成功の条件
- (四) ノース・カロライナ州知事としての業績
- (五) ジョンスン支持からケネディ支持への転換
- (六) 商務長官の活動範囲
- (七) 閣僚就任後の活動
- (八) 目立たない郵政省での目立つ人物

(九) デイの性格と才能

(十) アドレイ・ステウンソンとの関係

(十一) 西海岸での勢力扶植

(十二) 「ブルーデンシャル保険会社重役」とケネディの接触

(十三) 郵政長官就任後の活動

(一)

一九五二年の春のことである。ノース・カロライナの煙草生産地帯のゴールドボロウの近くの安料理屋の出納係は立派な服装をした一人の紳士から選挙用の名刺をさし出され、いきなり政治的伝言をされたので驚いた。

「私はルーサー・ホッジスです。私は副知事に立候補しています。私はまだ公職についたことはないのです。どうぞ私に投票して下さい」と件の紳士は汗をふきふき言ったかと思うと、急いでドアをあけて出て行ってしまった。

「あなたは現在ラレイに地位がある訳でもないし、ワシントンに仕事を持っている訳でもないでしょう。だったら、私はあなたに投票するわ」と、その出納係は後ろからおっかけるように彼に返答した。

「私は其処からはじめたのです」とルーサー・ホッジスは回想している。それまで実業界で成功した経歴を持って来たホッジスは、五十四歳で政治の世界に入ったのである。九年後、彼は国家的な人物となり、ジョン・F・ケネディ内閣の商務長官として、最初に、そしてただ一人の候補として選ばれたのであった。そして次に、デイについてであるが、

一九五〇年の夏、当時イリノイ州知事をしていたアドレイ・E・スチヴンソンは、或る日僅かな保養を求めて、ブルーミントンの妹の家へ行った。当時、彼は州保険局委員に誰か新しい人物を探し出すという仕事を持っていたのである。その日のうちにスチヴンソンは或る大きな保険事業の会頭をしている人を来客の一人として迎えたが、彼はその人にいくらかの助言を求めたのであった。「厳格に事務を処理する若い法律家で、保険事業関係のどんな派閥とも結びついていない人をえらびなさい」という忠告をスチヴンソンは受けたのであった。

その夜スチヴンソン知事は、彼の補佐要員で三十五歳のJ・エドワード・デイと、デイの妻メリー・ルイズと共に、自動車でスプリングフィールドに帰った。六〇マイルのドライブの途次、スチヴンソンは後部座席で、からだを縮めて丸くなっていたが、その間デイ夫妻は、保険事業の役員の方の先程の助言について議論をしていた。

最後にデイ夫人が言った。「まるで貴方のことを言っているようだわ」。それから数週間後、J・エドワード・デイはイリノイ州の保険局委員になっていた。この地位を得たことよって彼は、それから三年後、或る保険会社の幹部に採用されることになり、今度はその地位が飛石となって、それから八年後に、ジョン・F・ケネディ内閣の郵政長官に任命されることになったのである。

ホッヂスとデイの二人はケネディ内閣における「政治的実業人」である。商務長官としてホッヂスは実業界のために語り、実業界をニューフロンティアに沿った線に持って行く責任を課せられていた。デイは郵政省を管轄しているが、郵政省は五〇万の常勤職員を擁し、それ自身此の国における最大な設備として、こまかな業務を担当していたのである。

二人はいずれも通常の意味における職業的な政治家ではない。彼らはいずれも、その背景としてはっきりした政治

組織を持っている訳ではない。だが二人とも実業と政治のいずれにおいても、これを急速に前進せしめるためにその能力を活用することにおいては、相当豊富な経験を持っていたのである。このことについては、彼らは共通のものを多く持っていた。だが、この二人は個人個人としては非常に異っていたのである。

(二)

ルーサー・ホッジスはケネディ・グループの中では多くの点で、特異な存在であった。彼は内閣の中で十九世紀生まれのただ一人の人物であった。彼は非生産的な理窟を色々とこねまわすことは出来ないし、また彼の同僚のように政治的気転をきかすことは出来なかつた。ともかくホッジスはまったく違った人物であった。彼は深い独創的な思索家というよりも、プロモーターであり、心底からのセールスマンであった。彼が積極的にかかげる政策は商業的な基準からみると進歩的であつた。そして、彼はどんな町の商業会議所の会員になつても、必ずそこで成功し得た人物であつた。

彼は苦勞して其迄の地位を築きあげた人であつた。彼の人生経路の物語は、ホレーシヨ・アルジャの物語のようであつた。それは烈しい労働、決意、身をけずるような思いをする選択——そしてずっしりとした一服の幸運などが、寄りあつまつて生まれたものであつた。彼は一八九八年三月九日に生まれたが、それは政治家としての夢に合致するような誕生であつた。彼はヴァージニア州ピッツィルヴェニア郡の父親の小作農場にある彼の小屋で生まれた。この小屋はまことにがっしりとした小屋で、それを見ると誰もがホッジスの生まれがまずしいものであることに印象を受

ける。さいわいなことに、この小屋はまた本当に丈夫であったので、今日でも地方の記念物として残っているのである。

ホッジスは八人の子供のうち八人目の子であって、家族の中でカレッジまで行ったのは彼一人であった。彼はノーフォーク・ウエスタン鉄道で新聞を売って、ノース・カロライナ大学へ入るための金をかせいだ。事実、第一次大戦の勃発について彼が時々思い出したことといえば、それは、その日普段よりも新聞が売れたということであった。

大学でホッジスは給仕をしたりかまどの番をしたりした。また学生団体の議長に選ばれ彼のクラスの最優秀生徒として拔擢された。卒業後、彼はノース・カロライナのリークスヴィルの自宅に帰り、その地方の繊維工場の総支配人の秘書として働いた。それは一九一九年のことであった。その工場の持主はシカゴのマーシャル・フィールド家であったが、彼はやがてその工場の中にはじめて人事部をつくった。彼はその組織の中で急速に自己の地位をかためて行った。一九二七年、毛布工場長、一九三四年リークスヴィル地区の全工場の生産部長。一九三八年、米国および海外にある全部で二二九のマーシャル・フィールドの工場の総支配人。一九三四年、副社長となりマーシャル・フィールド産業の製造部門責任者となり、住居をニューヨーク・シティに構えた。

一九五〇年になると、彼の年収は七万五千ドル以上になっていたけれども、ホッジスはこれで彼の収入はもう充分だと考えた。彼はマーシャル・フィールドを離れて、余生を公共奉仕につくしたいと彼の友人に語った。彼はその約束を立派にまもった。彼はマーシャル・フィールドを離れてマーシャル・プランに参加し、そして西独復興計画の工業部門の責任者となった。

ノース・カロライナの事業関係の友人が、一九五二年に副知事に立候補するよう勧めたことがあった。政治的新参

者である彼が立てば、三人競争で第三着の走者になることは間違いないと思われていたが、彼は大勝した。二年後、ウイリアム・ウムステッド知事が心臓病で死んだ。そして彼はステートハウスの主人公となった。一九五六年に今度は自己の職権として四年間の知事職についた。一九六〇年に彼の任期が終る時に、彼がケネディ政権に参加したのは自然のことであった。

簡単に言えば、ルーサー・H・ホッジスがケネディ内閣に入るまでの略歴は以上の通りである。だが、彼は一体どういふ人物なのか。彼はどうしてこんなに速く、その地位を上昇し得たのだろうか。

(三)

彼の仲間の一人はこれについて「不思議に思えるけれども彼の秘密の一つは、彼が肉体的に死んでも死なない位健康だということだ。彼はほとぼしるほどの健康を持っていた」と言っている。ホッジスは大体において毎晩十時に就寝した。夕客ゆきが来ても（失礼ですが）もう寝ることになってますので」と来客にはっきり言ってしまうと、その場から姿を消すのが常であった。

ホッジスは六時半に起き、ランニングにとび出し、それから一日中はげしく働いた。彼はほとんど煙草を吸わないし、酒も飲まなかった。彼の好きな食物は白いんげん、かぶらのサラダ、「とうもろこし」のパンである。彼はコーヒーを飲んで休憩することを拒否したし、また、あまりきびしい訓練に馴れていない州の職員たちにもコーヒー休憩を許そうとしなかったので、ノース・カロライナ州政府内で一騒動の原因になったことがあった。一日の仕事が終る

と彼はまったく死んだように仕事をやめてしまった。彼はほとんど後ろを振り返ることをしなかったし、彼が下した決定についてとやかく思い煩うことは決してなかったと友人は語っている。「私はベッドに問題を持って行かない」と彼は言っていた。

ホッヂスのがむしやらかな勤労と野心は、もとはといえばリークスヴィルの工場街における幼少の家族生活の中で養われたものであった。兄さんや姉さんたちは大部分が当時の習慣に従って、十歳をすぎると間もなく工場に働きに出かけた。年端のいかぬルーサーも、彼の順番が来る迄に高等学校生活を二年半しか経験出来なかった。彼の回想によると、父親は彼が大学へ行くという考えに賛成しなかったようである。けれどもルーサーの決意は固く、ほとんど自分自身の気力だけで、チャペル・ヒルの大学に入ってしまった。ホッヂスはそれからの生涯ずっと働きつづけて来た。長年にわたる彼の事業仲間であり友人でもあったノースカロライナの上院議員・B・ニヴュレット・ジョルダン（在職者が死んだ時、ホッヂスは彼を合衆国上院議員に推薦したのである）は、ホッヂスの成功を次のように分析している。「彼はまさに田舎の優れた系統を引く豊かな才能に恵まれた土着の人物であって、生きんがために格闘し、地獄のように働らいて来た」。

生涯を通じてホッヂスは事業で成功するコツを心得て来た。彼は言っている。「金（かね）をつくることは、私の知っていることの中で一番やさしいことだ。常に眼を開いていて、何か適当な金（かね）の出来そうな可能性のあるものを採り上げるのが私のやりかただ。どちらかというところ、それは冷酷なことだよ。君が出来る一番良いことは、何か人がこわすもの、食べたり吸ったり飲んだりするものを採り上げることだ。金（かね）は借りられるだけ借りなさい。そして、他人の金をすべてあなたの成長のために使うことです」。

ほとんど三十五年間、ホッヂスはこのやりかたを色々な投機事業に適用して来た。彼がそれ迄に五〇万ドル以上の蓄財をつくりだしたのは、彼の主たる仕事である事業や政治の管理職によってではなくて、どちらかというところ、彼が余暇にやって来たこれらの投機事業によってであった。

だが、そもそもの最初の投資は失敗だった。それはまだ彼が毛布工場の工場長をしていた一九二〇年代のことであったが、彼は（リークスヴィル銀行から六分の利子で借金して）地方の家具工場に一〇〇ドルつき込んだことがあった。父親はこれが一五〇〇ドルの配当を生むと聞かされていたが、結局彼らは、もとも子もなくしてしまった。人気のある若い工場長にもう一つの投資の機会がやって来た。それはホッヂスの好みに合っていた。すなわち燃えてなくなってしまうもの——燃料油やガソリンの株であった。ホッヂスと二人の間は一〇〇〇ドル投資して、シエル石油会社のこの地方の配油事業管理人となった。一九二〇年代の後半にシエルは東部にその勢力を延ばしつつあったのである。五年後、ホッヂスとヴァージニアのダンヴィルという背中の指圧治療を業としていた男は、三万四〇〇〇ドルで残りの一人が持っていた株を全部買い取った。「クラーク石油会社」の商号のもとに二人の企業家はノース・カロライナ州のロッキンガムおよびカスウェルとヴァージニア州のヘンリーおよびピッツビルヴァニア地方に百ヶ所におよぶサービスステーション網をつくり、二人とも殆んど毎年この事業から六〇〇〇ドルの収入を得た。そしてホッヂスが知事になってから数年後、五〇万ドル以上でこの会社を他人に売った。ホッヂスは仲間に本来から物事を細密に観察する癖のある背中の指圧治療業者を持ち得たことを感謝している。このことは、なぜにホッヂスが自分のことをひとたび事業をはじめると「すこしばかり金銭問題にかたくなつて」くる「猪突家」であると考えているかの理由でもあった。

この二人はいずれも配油事業を彼らの正規の仕事にはしなかった。ホッヂスは自分が正規の仕事をしている時に、彼の石油会社やその他の本職外の投資事業について論議することを常に拒否して来たと言っている。知事としての彼は周囲の者に、そういう問題で彼をたずねて来るものは、すべて拒否するよう命令した。「そういう話でしたら、家へ来てくれるか、週末にして頂きたい」と彼は言った。

ホッヂスがただ一度だけ本職以外の投資事業のためにフルタイムで働いたことがあるが、それは一九五〇年代のはじめに彼がハワード・ジョンソン・レストランを「発見した」時である。彼はその会社の経営管理問題についての会合に出席するために、いくつかの州を旅した。一度、ホッヂスが一連の長い改良案を提案した時など、ハワード・ジョンソン自身が急所をつかれたと感じたのであろう。其の後ホッヂスと共にハワード・ジョンソンの特権のいくつかを所有するようになったエヴェレット・ジョルダンは、彼の協力者ホッヂスについて、ホッヂスは熱心な勉強と飽きること知らない探求心でレストラン経営事業について「知るべきことはすべて」知っていたと述べている。彼は食糧と労務について経営上の収益を計算した。彼はハンバーガーの中に肉をどの位入れるかということ以外は、何でも知っていたとジョルダンは述べている。

商務長官は「利害の衝突」を避けるために輸送事業や他の産業株をすべて売却してしまったが、それでもいくつかのホテルの所有権と、ほかにノース・カロライナのダラム、フェイトヴィル、ラレイ、グリーンズバロウ、シャーロットにおけるハワード・ジョンソンのレストランの所有権だけはまだ持っていた。彼は定期的に彼のレストランの料理場を検査した。自分の食物について非常にやかましい男であるホッヂス（「食事は正確に料理され、良いサービスを伴わなくては駄目だ」と彼は言っていた）は、料理場が清潔であることに、衛生的ばかりでなく、経済的な価値も

認めていたのである。「きたなくしておくのと同じ位費用をかけないで、そこを綺麗にしておくよ」と彼はコックたちに語った。

レストラン事業の経営はホッジスの重要な性格を説明していた。一つの新しい考えを得ると、彼はそのあらゆる面をひろく研究した。そしてひとたび開始すると、彼は彼の事業を他人に売りこむために対人関係の打開に努力した。彼はまったく実際的な人物であつて、純粹理論には殆んど興味を示さなかつた。これこそは優れたセールスマンまたはプロモーターの型であつて、ホッジスのそれ迄の全人生——実業界および政界における——を推進して来た型であつた。繊維品を売り、ドイツの復興をたすけ、ノース・カロライナに産業を導入し、アメリカの実業界の生産能力をあげようとする——これらすべての仕事をするにあつてホッジスは、いつもサンプル・ケースを持ち充分な準備をととのえたセールスマンであつたのである。

これは驚くほどのことではないが、彼に財政的な成功をもたらした推進力と優れた事業感覚は、また政治の分野における彼の企業心の基礎でもあつた。重要なことは、選挙によつてえらばれる役職における彼の経歴が、飛躍を直前にひかえた典型的なホッジスの態度によつてははじめられたということである。一九五二年のノース・カロライナの副知事の地位を得るための競争において、彼が最初に相談をかけた人たちは仲間の実業人たちであつた。

副知事の地位についてホッジスは次のように回想している。「いまでは総ての人たちが知っていることに、私も気がついて来た。それは戦略的な仕事であつた。副知事はいくつかの委員会の委員を任命したし、これらの委員たちは立法を支配する力を持っていたが、この委員会にはいくつかの利害関係が重なり、また院外団もやつて来て、いつも何らかの交渉をしに来た。とにかく、これは非常に重要な仕事であるということが私にははっきりわかつた。しか

も、一人または二人の副知事と話し合ってみて私気がついたことは、彼らは副知事の職を得るために働いて来たのではないということだった。彼らは選ばれた人たちだった」。

彼の選挙運動は伝統を粉砕してしまった。「あわれなホッジス。彼は最後までやるだろうよ」と職業的政治家たちは、にやにや笑いながら言った。だが、彼らは二つのこと、すなわちホッジスは顔のひろい人物であり、冷酷なまでの働き手であるということとを、考慮に入れるのを忘れていた。彼はかのゴールドボロウの小料理屋で驚かした出納係からはじめて、州内の一〇〇郡を一つ一つすべてまわって歩いた。彼は燃料補給ステーションにすべて立ち寄り、一回に一ドルのガスを買っては、選挙用の名刺をくばって歩いたのであった。彼は約六〇〇〇ドルの選挙費用を彼自身ですべて支払った。彼は州内の裁判所をすべて訪問した。各地域ごとに彼にはロータリー・クラブの友人がいた。ロータリー・クラブは社会的に自分の名を知られるために、彼が長い間つかって来た気に入りの手段であった。（マーシャル・フィールドの副社長をしていた時でさえ、彼はニューヨーク・シティ・ロータリークラブの会長であった）。ホッジスは勝った。州内の通常の政治勢力の助けを借りずに選挙されたホッジスは、普通の政治家たちに対する義理立をほとんど感じなかった。州上院の議長役目を果していたホッジス副知事は、古くからの委員会構造を突然改革した。「三十五から三十七の委員会があつたに相違ない。私は十または十一の委員会を解散させた。この措置はまづかったが、そのことに気がつかないまま、同時に数人の秘書官たちを餓首してしまい、いく人かの永遠の敵をつくらしてしまったことは失敗であった。もしも私がどういう事態に直面しているかを知っていたら、そういう措置をとる勇氣を持ち得たかどうか私には分らない。何故ならば彼らは、私の喉もとさえ切ることが出来たのであるから」と彼は言っている。

一九五四年十一月七日、日曜日の朝、副知事ホッジスと、以前に学校の先生をしていたことのある其の妻のマルタは、リークスヴィル・メソディスト教会での日曜学校に出かけようとして準備をしていた。電話が鳴った。彼女はこの電話について次のようにいっている「電話はウムステッド知事の秘書官エド・ランキンからでした。ランキンは「ホッジス知事」と言いました。そうです。彼は言ったのです。ホッジス知事、ウムステッド氏は数分前に亡くなられました」。ホッジスはこの朝の電話を決して忘れないだろうと語った。

この商業人の知事はすぐに州庁の職員に、彼が違った政治信念の持主であることを印象づけた。知事官舎における最初の一時間に彼はバビロンにおけるイノセントの役割を果した。そして政治改革の時代に直面する州職員の覚悟を新たにさせたのである。

「机の上には一組のボタンがおいてあった。一部にはいたずらの気持で、また一部には何が起るだろうか知りたいという気持で、私はそれらのボタンに穴をあけはじめた。背後の事務所や、いたるところから人たちが驚いて立って来た。彼らは入って来て見つめたが私はそこでは新顔であった。そして私も彼らの顔を知る筈がなかったのである。私は言った「あなたがたは何をしているのですか。また、なぜあなたがたは、そういうことをしているのですか」これは基礎をゆるがすような質問であった。そして困惑と驚きの気持を入れて来た職員たちにおこさせ、非常な興味を呼んだ。」

知事の椅子にすわってからでも、彼は組織による政治にはほとんど注意を払わなかった。ホッジスは州全体を見わたして優れた法律家を探した。彼が求めている法律家は立派な政治的素質は持っていないながら、政治的な紐によって州議会に権力をふるうということがないような人物であった。ノース・カロライナ大学の行政研究所のポール・ジョンソン

ン教授が、えらばれて彼を助けることになった。ジョンソンは最初半信半疑であったが、その後ホッジスに魅惑されてしまった。「彼はよい仕事をしよう并希望していた。そして政治の失敗をあげて非難するようなことはしなかった」と彼は言っている。

はじめの頃、ジョンソンとウムステッドの補佐官の残留者であるエド・ランキンは、ホッジスの州職員任命を補助するために、特別の「選抜文書」をつくり出した。この文書には指導的な候補者の名前や背景に加えて、彼の仕事、給料、所属教会の牧師、また彼の所属する民主党郡委員長などが書かれてあったし、また、民主党郡委員の身元まで書いてあった。

民主党に所属している郡の政治家たちの名前が其の文書に列記されているのを見て、新知事は驚き、かつ苛立った。彼は州政府内の地位に人をつけるにあたって、彼らの勧告に拘束されたくはなかったのである。それで読むのに骨の折れる色々な印刷物から、政治的な資料が急いで集められた。仕事はもはや依怙負嶺でまざるものではなくなった。これによってホッジスのするすべての任命の様式がきまったのである。知事職にある間に、彼は三〇人以上の州判事を任命した。「あのように非常に立派な意志を持っていれば、一人の男が二十五年間にわたって州を統治することも可能であろう」と、ジョンストンは言っている。だがホッジスは判事をえらぶにあたって政党政治に殆んど注意を払わなかった。その代り、彼は州内の法律畑の人で、政治色のない指導的な人物に相談した。そして州最高裁判所の判事たちにさえ、助言を懇請したのであった。

ホッジスの在任中のもっとも変っている事の一つは、親しい彼の縁者たちが利益を得た様子のないことである。南部の知事たちの兄弟や、或いは義理の兄弟は、その家族のものが政治的に重要な地位につくにつれて、特別の商業上

の成功をおさめることが多かった。だが、当時ホッヂスの兄弟の一人はリークスウィルで、シエル石油のサーピス・ステーションを経営していた。もう一人は州の刑務所の監督官であった。既に寡婦となっていた三人の姉たちはひっそりと木工場で働いていた。もう一人の姉は学校の先生であった。さらにもう一人の生き残りの姉は退職した夫と共に暮らしていた。彼らの生活は彼の栄達によって変ることはなかった。

(四)

知事に在職中ホッヂスは州政府の多くの面を改造した。彼の改革の終局目標は常に同じであった。それは浪費をなくすこと、そして古い型の政治から州政府を切り離すことであった。彼はポール・ジョンソンを新しく設立した行政局の局長に任命し、彼に給料総額をへらしたり官僚的形式主義を切断する実質的権限を与えた。彼の動きでもっとも論争の的になったものは、道路建設の権限を持っているためにその委員たちが地方の政治的貴族になっていた昔からの地域公道委員会の組織を廃止したことであった。その代りにホッヂスは州全域を管轄する道路委員会をつくった。外見上、この委員会は「非政治的」であろうと思われる。州議会の職業政治家たちは、「非政治的な」公道組織という考えを嘲笑した。だが、これによって、旧権力は試練にさらされたのであった。

ホッヂスの政治嫌いを、或る者は想像力の欠乏や無邪気な性質のせいであるとし、他の者はこれを荒けずりの正直さのせいであるとした。年をとってから政治生活に入り、見知らぬ世界に安堵感を得られない人たちには、こういう特徴が屢々あらわれるものである。その動機がどうあろうとホッヂスは、いつも裁判所よりも行政政府の人たちの考え

を自分の考えとして取り入れて来た行政官なのであった。彼は政治を能率をあげるためのものであると考えていたのである。

これらすべての結果として、ルーサー・ホッジスはノース・カロライナでは今まで全然見ることが出来なかつたような政治機関をつくり出したのであった。事実誰もこのような政治機関をそれまで見ることは出来なかつたのである。彼にとって幸運だったことは、彼に対抗する政治家たちが民衆の間における彼の公然たる人気に非常に懼れをなしていたので、まる四年間の在職を意図して一九五六年に彼が立候補した時、対立候補になった人は、人にその名を知られていない不運な二人だけであった。ホッジスはあたかも強力な敵が彼を政治的に滅亡させようとしておびやかしているように、選挙運動をやりぬいた。彼は庄勝したのである。

一九六〇年には、知事職をやめる準備をしていたので、ホッジスは彼の後継者をえらびはじめた。彼は司法長官マルコム・シューエルを激励して民主党の第一予選会に出馬させ、彼のための基金募集を助け、友人たちにシューエルを支持してくれるよう頼んでまわった。だがホッジスは彼の個人的な人気をゆずりわたすことは出来なかつた。司法長官は四人の候補者のたかいで、あわれにも三位を獲得したにとどまった。上位二名の候補者は、若い検事で州内の自由主義勢力の人気者であったテリー・サンフォードと、以前にノース・カロライナの司法長官補をしていたことのあるイー・ビーヴァリー・レイクであった。レイクはこの州をかつての厳格な人種差別政策に逆行させる約束をしていた人である。決選投票において、ホッジスはサンフォードを支持し、彼が勝った。

六年間ノース・カロライナ州の知事をやっている間にホッジスは二つの大きな理由で全国的に知られるようになった。彼は当時社会的に非常に大きな問題であった学校の黒人隔離禁止問題についてノース・カロライナの立場を穩健

なものにした。そしてこの業績の上に立って彼はこの州に新産業を導入する強力な運動の先頭に立ったのであった。

ホッヂスが知事になる僅か六ヶ月前に、アメリカ合衆国最高裁判所は学校の黒人隔離に対して反対する画期的な判決を下し、南部の静寂に終止符を打ったのであった。このため生まれた危機は彼が直面したもつとも手ごたえのある問題であったとホッヂスは述べている。雑誌タイムはさらに其の論旨をすすめ、彼のおかれていた情勢について「突然、小作農の息子がアボマトックス以来の最大の危機のまん中に立っている」と述べた。

彼の州の北や南でホッヂスの眼にうつるものは、ヴァージニアやサウス・カロライナの極端に非讓歩的な人種政策であった。だがタールヒールといわれるこの州は、その海岸の沖合に大きな暗礁があるために奴隷貿易はずっと昔からやっておらず、そこに定着した自作農たちも奴隷はほとんど連れて来なかった。この州が高慢な近隣の州ほど、昔の南部の植民地社会的様相を持ったことは決してなかったのである。この地に育った一人の哲学者は、ノースカロライナを「二つの高慢な山の間にある謙讓の谷である」と呼んだことがある。

ホッヂスは裁判所の決定ならびにノースカロライナの立場を研究させるために、大学出の若い頭脳明敏な法律学者ロバート・ガイルズを抜擢した。気をもんでいる州の実業界の指導者たちと共に活動していたホッヂスは、或る計画をたて、議会および国民によってこの計画案が承認批准されるよう努力し指導した。ノースカロライナの対応策は、すべての変更を阻止する代りに、個人個人の入学許可基準に従って以前は全部白人ばかりであった学校にニグロを入学させることを、各地域の学校評議員会に許可したことであった。だがこの措置にも黒人隔離の安全弁がもうけられてあり、各地域の学校は関係市民の多数投票によって黒人の入学を阻止し得ることが決められていたのである。

表面上、州は地域学校評議員会の決定に手を触れないでいたが、ホッヂスの補佐官たちは実際秘密の内に、州の都

会地域の学校関係者と会っていた。静かな協議が行なわれた後シャロット、ウインストン・サレムおよびグリーンズボロウの学校評議員会は、すべてが白人の小中高等学校への最初のニグロ生徒をほんの名目の数だけ入学許可する決定を、一九五七年の或る同じ日に発表したのであった。選択して黒人を白人の学校に入れて行こうというノース・カロライナの計画は、それまで裁判所のあらゆる審査に耐えて来ていた。そして、殆ど南部諸州で見られなかった程度にまで、人種問題を中和化してしまっていたのであった。上級裁判所の判決に自発的に従うことによって国民の信用を得つつあったけれども、それでもノース・カロライナにおいて当時、黒白区別廃止の公立学校へ入っているニグロの生徒は百人に満たなかったのである。隣のヴァージニアはその不運な反抗のために全国の黒人からにらまれていたが、そのヴァージニアにおいてさえ二〇〇人以上のニグロの生徒が、裁判所の判決以後、統合された学校に通っていたのであった。

統合の危機が減少して行くにつれてノース・カロライナは外部の産業の注意をひく都合のよい立場になって来た。この州は、当時に於てなお人種問題が爆発する可能性を包含していた南部の諸州よりも、はっきりした利点を持っていた。ホッジスは敏速にこの彼の機会に乗じたのであった。ひろく知られている産業を求めての北部への進出は実をむすんだ。ホッジス治政中のノース・カロライナ発展計画によって、二二三二四の新工場設備または拡張設備が導入され、三一万八二三三の新しい仕事が導入され、毎年新しく支払はれる給料総額は四億三千一百万ドルに達し、また投下資本は十一億ドル以上となった。

ホッジス時代のノース・カロライナにとってのもっとも重大なつまずきは、一九五九年のヘンダーソンにおける繊維工場の長い烈しいストライキから生じた。ホッジスはこのストライキから離れていようと努力した。だが、平静の

気分が害された時に、仲裁しようという努力をはじめざるを得なかったのである。組合と工場の所有者はホッヂスが介入した後協定に到達した。だがこの協定が実行される前に、経営者側が了解によって後退した。私は会社によって「だまされた」とホッヂスは述べた。だが、あらゆる種類の泥試合の最中にホッヂスは、非組合員労働者が毎日工場に導入されるのを見て、秩序を維持するために州民軍の出動を要請した。織維労働者組合のカロライナ地区委員長を含む八人の組合員の逮捕、および共同謀議の嫌疑についての有罪判決によって、ストライキの背景は打破されたが、それでもホッヂスは嫌な感じを拭いさることは出来なかった。

州内の労働組合の指導者たちは、ホッヂスは「反組合的である」と非難した。彼らはヘンダーソンの混乱の多くはホッヂスの責任であると考えていたのであった。織維労働者組合の役員たちは、ホッヂス自身がかつて雇傭者であったことを述べたのであった。組合は一九三八年にマーシャル・フィールドのリークスヴィル工場でのプラント選挙に勝った。だがホッヂスとの間に協定を結ぶことは不可能であったのである。不当労働慣行に関して全国労働関係局が指令を発する前に、組合側はついに工場管理を撤回せねばならなかった。会社が満足すべき協定に同意したのは、それから後であった。この同意によって労働関係局の乗り出した事件は解決したのである。

ホッヂスは労働組合との間に悶着をおこしていたけれども、一九五九年の南部における最初の最低賃金法の議会通過に尽力したのである。一時間七五セントの賃金法案を論議する議場に、数千人の労働者がおしかけて来た。労働組合の指導者たちでさえこの法律について熱心であった。

ホッヂスが政治的に成功をおさめた鍵の一つは、彼が宣伝について普通には見られない巧妙さを持っていたことだった。一九六〇年頃に於ては彼は生まれながらの宣伝人のように見えただけでも、彼がはじめて政治生活に入った頃

には宣伝については甚だしく愚直であった。彼が副知事として最初の一年の任期にあった時、雑誌ビジネスウィークの編集者が長距離電話をかけ、八時間のインタビュをするため、また政界に入った実業人の生活写真を百枚とらせ、貰うためレイに記者団を派遣していかどうか尋ねた。「私は日常生活で誰とでも一時間以上決して話したことがない。そして一時間以上たつと、もう知性的な話は何も出来ないというのが私の回答だった」とホッジスは言っている。「私はその男に、台紙と私自身の写真を持っているから、それを送ることにしようと言った」。最後に、ビジネス・ウィークは「政治的実業人」である彼は話題を持っているということに彼を確信させることが出来た。その結果彼ははじめて大々的に全国に報道されたのであった。

それ以来、記事や写真をとるのにホッジスを説得する必要は殆んどなくなった。彼は下着のまま雑誌ライフのためにポーズしてみせた最初の知事となった（彼が膚からノース・カロライナの産物を使用していることを示すためであった）。彼はもう一つの宣伝写真用において洋服をすっかり着たままシャワーを浴びた。或る時など、州主催の釣大会の宣伝のために、自分が海にほうり込まれるのを許可したことがある。ひげをそったサンタクロースのような白髪の知事の写真が、諸雑誌に一杯掲載された。「あのホッジスは素晴らしい男だ。求めれば何でもやってくれる」と全国的に知られた一人のニュースカメラマンは述べたのである。

個人的な商標を持つことは役立つことを立派な事業発起人たちは誰でも知っている。知事になった日、ホッジスは白いカーネーションをとってポタンの穴につけたが、それ以来彼の在任期間中、その花をつけていないことはほとんどなかった。他の数名の知事たちと一九五九年にロシアに旅した時、ホッジスはプラスチック製のカーネーションをつけていたが、そのカーネーションが本当に実物のように見えたので、ソヴィエトの警護員は、彼が毎日どこ

からそのカーネーションを手に入れるのか不思議に思った。

掠奪によって得られたロシア領土の上を彼と共に旅をしていた仲間たちは、ホッジスが、驚いているソヴィエト人たちの多くにノース・カロライナ製の煙草をあげてまわっているのを見て愉快に思い、アメリカ本国での消費者用の宣伝写真のために、彼にラクダと一語に写真をとらせてみようと思った。カロライナの知事が助かったことには、ロシア国家はラクダを生産することが出来なかったのである。ホッジスはカメル煙草の競争者たちの其の写真に対する反応を心配していたのであった。

ホッジスはまた、自分自身に相当政治的危険がおよんで来るにも拘らず、自分の州の進歩主義的な名声をひろめるために、宣伝を利用したのである。一九五九年に新興アフリカ国家ギニアのセク・トーレ大統領が訪米した時にノース・カロライナを訪れるに当って、国務省がホッジスに主席接待役を依頼したが、彼はそれを承知したのであった。ホッジスが主催した白人・黒人のいりまじった饗宴において、訪問して来たアフリカ人も著名なノース・カロライナのニグロたちも、接待を受けた。それまでは「白人のみを宿泊させていた」チャペル・ヒルの州経営のカロライナ旅館を開放し、アフリカ人ばかりでなくニグロの新聞記者たちにも使用を許可したのである。こういう取扱いはワシントンからも、トーレ自身からも賞讃を受けた。また、ニューヨーク・タイムズや、雑誌タイムのような全国的な出版物からも、拍手喝采を受けたのであった。

だが、ホッジスの事業推進の努力のすべてがそう滑らかに行った訳ではない。彼の写真が一九五九年五月号の「タイム」の表紙に「南部の指導者・ノース・カロライナ」のシンボルとして掲載される筈であった。だが、この表紙計画はヘンダーソン・ストライキの状況が暴力のふるわれるような事態にまで立ち至った時に中止された。その後、雑

誌タイムは表紙をかざるために専属の美術家が準備した肖像画をホッヂスにプレゼントした。此の件について回想しながら、当時ホッヂスは次のように言っている。「もしもユーモア感覚がなければ病気になるてしまう所ですよ」。

(五)

ノース・カロライナの法律によれば、選挙された知事が次の任期に引続いて知事であることは出来ない。在任期間の終りが近づいて来るにつれて、彼は自分の将来の可能性を検分しはじめた。彼は公共奉仕の仕事が続けようと決心した。彼の背景と彼の最近の活躍をもってすれば、彼がいくつかの異なった政治分野において傑出した地位にえられるであろうということは明らかであった。彼の仕事、経歴、産業の導入を求めて成功したこと、またヨーロッパ旅行の経験があることなどは、自然彼を重要な政府の役員や商業における基本的要職担当の候補者たらしめていた。西ドイツにおける経験、充分に宣伝されたロシアおよびヨーロッパへの旅は、セク・トーレに対する厚遇と相俟つて、彼を外交担当の地位につかせるための妥当な候補者たらしめていた。人種問題についての彼の立場は穩健であると噂されていたので、次第に彼は全国的舞台での魅力を増して来ていた。

このようにして、一九六〇年のはじめにはルーサー・ホッヂスは、彼自身の政治生活の将来は、来たるべき全国選挙如何にかかっているということを実感したのである。重要な民主党の州の指導者として、ホッヂスは有力な指導的民主党大統領候補の代表者たちから、助力を求められたのであった。ロバート・ケネディはホッヂスについて、彼は敵対的ではないが明らかにリンドン・ジョンソンにかたむいておられると思つた。「私は、この年は民主党の年になるだ

るう。そして見苦しくない候補者なら、誰でも勝つだろうと思っていた」とホッジスは言っている。ホッジスは、弟のケネディに対して、彼の兄の宗教は当選の邪魔をしろとさえ言ったことがある。だが、もしもジョン・ケネディが指名されるならば、彼は出来るかぎりひろく国中を演説してまわり、宗教的寛容の必要を強調するであろうとつけ加えたのであった。

ケネディ勢はホッジスの後継者テリー・サンフォードに働きかけた。そしてサンフォードは、南部の著名な政治家としてはじめて、ジョンソン陣営を捨てた立場に立ったのである。この劇的なサンフォードの声明が行われる前夜ホップ・ケネディはサンフォードのホテルの居間の外側の廊下でホッジスに会った。ホッジスは何が起りつつあるかを知っていたが、反対の言葉を述べなかつたのである。

候補指名を受けた数週間後、ジョン・ケネディはホッジスに電話をかけて、「ケネディのための実業人運動」の全国名譽総裁になってくれるよう頼んだ。ホッジスは承諾した。この地位についたホッジスは国中をひろく旅行してまわり、彼の言った言葉どおり、常に宗教問題を論じたのである。ホッジスはまた保守主義者がケネディをさらに受けつけやすくなるように努力し、各州毎に実業人のグループを組織して公然と民主党の綱領を支持させるようにした。ケネディの領袖たちはその後ホッジスのこの努力は、民主党を労働者支配の党であるとするあり得べき破壊的な攻勢を減殺させる補助手段として、きわめて効果的であつたと思うようになった。

そもそもの最初からジョン・ケネディは、彼の商務長官としてホッジスだけを考えていたのであつた。彼はこの仕事をするのに必要な属性をすべて備えていた。ケネディはその内閣に著名な南部人が必要としていたし、またホッジスは実業界から充分に尊敬されており、ニュー・フロンティアに適当な進歩主義者の評判を得ていたからである。ケ

ネディをかこむ内輪の人たちの間では、ホッヂスが商務長官の職を得るであろうことは、簡単にあたりまえのことだと思われていた。だが、ケネディが「商務省問題を論議するために」パーム・ビーチにホッヂスと呼ぶまでは、誰もこのノース・カロライナの知事にそのことを告げた者はなかった。その時までには、ホッヂスは多くの新聞によって商務長官の正式候補にえらばれていることを、既に相当前から発表されてしまっていたのである。実際に彼がその仕事を引受けてくれるように言われたのは、一九六〇年十二月三日に閣僚詮衡を発表するにあたってケネディが、彼をパーム・ビーチの彼の屋敷の内庭へ案内して行く十五分前のことであった。

(六)

その瞬間からホッヂスは彼の新しい職責について彼の為し得るすべてのことを発見するために彼の典型的な熱のこもったやりかたで動きはじめたのであった。そして彼はこの仕事は彼が考えていたのと同じようなものだとということにすぐ気がついた。商務長官は多くの局の任務範囲や担当する責任の分類をする仕事を統轄する。ごちゃまぜの諸活動の中には、統計局、沿岸および測地線調査、実業および弁護士業務行政、商業経済局、特許局、公道局、内水管理庁、全国規格局、海事部、気象局などの活動が含まれる。これらの諸機関の殆んどすべては、かりに商務長官がいなくとも、十分に合理的に運営されて行くであろう。これらの機関のうちのいくつかは、一九〇三年に商務省が設立される以前においてすら、既に仕事をしていたのである。大統領内閣は各省の職務の重要性をそのまま反映する人たちがえらばれて構成されている訳だが、商務長官の地位がこの内閣の中で大きな影響力を持つようになったことは殆ん

ど全くなかった。

一九二一年から一九二八年まで商務長官をしていたハーバート・フーバーは、商務長官の地位を彼自身の政治的運勢の強化に使うことの出来ただ一人の長官であった。だが、フーバーは商務省に入る前に、普通には見られないほどの権威を既に持っていたのである。大統領選出候補のハーディングは、彼に商務省の仕事を引き受けてくれるよう頼んだ。其の時フーバーは商務長官には商業、農業、労働財政、または外国貿易などを含むすべての重要な経済的決定への参議権が与えられるべしと主張したのであった。ハーディングは他の閣僚たちにフーバーの特別の地位を知らせることに同意したのであった。

商務長官としてフーバーは大きな権力者であった。商務長官は軍縮問題について彼に相談した。ミンシッピ―河が氾濫した時、フーバーとその属員たちは現場に三ヶ月もどまって、救済と復興の努力を指揮した。彼はゴムの値段段について英国人と争ったし、ゴムの生産地域におけるオランダ人の活躍について、彼の意見を述べた。

だが、フーバーは例外であったのである。その後の商務長官たちは、大統領との関係でそれほど自分を高い地位におくことは出来なかつたし、あるいはまた、実業界からも気に入られていなかったものであった。特に民主党政権下に於ては内閣のテーブルにおける「実業の椅子」は、すわり心地のよくない場合が多かったのである。フランクリン・D・ルーズベルトは、彼の最初の商務長官「アングル・ダン」ローパーに対して、「きつちりと腰をおろして、静かに坐っているよう」屢々勧告したのであった。F・D・Rはハリー・L・ホプキンスの政治的魅力をさらに増進せしめようとして、ローパーにかえて彼を商務長官にした。一年半の商務長官在職中、病弱のホプキンスは出たり入ったりして、彼の事務所三〇日とは座ったことはなかつたのである。

ジュス・H・ジョーンズは復興金融公社の指令をその儘を守って行くという条件だけで、ホプキンスの仕事を引き受けることに同意したのである。明らかに一人の副官がジョーンズに代って商務省をきりまわした。そしてジョーンズはルーズベルトと争って復興金融公社からの借款をひき出すことに、その時間の大部分を費したのであった。F・D・Rは、彼のことを私的に「ジーザス・H・ジョーンズ」と呼んでいた。ルーズベルトがジョーンズを免職したあと、怒ったこのテキサス人はこの復興金融公社を、商務省および彼の後継者であるヘンリー・A・ウォレスの手から切り離すよう議会に要請した。議会は圧倒的多数でこれに同意した。

ホッジスはすくなくともフーバーのやりかたに従おうと努めたのである。商務長官の席につく数週間前に、ホッジスはケネディ大統領選出候補と彼の責任の範囲について何回か話し合った。彼が最後に了解したことは、輸送と地域再開発のような問題については、彼に重要な役割が与えられるだろうということであった。

ホッジスは自分の仕事を基本的にはセールスマンの仕事だと考えており、事業や諸件案の発案推進に大きな重点をおいたのである。商務次官として彼はシアーズ・ルーバックのエドワード・グードマン・ジュニアを採用した（彼は多分、この国で一番すぐれた商人であり取引人であろうとホッジスは語ったのであった）。ノース・カロライナの行政問題専門家ポール・ジョンストンや、ホッジスのためにノース・カロライナの人種問題を研究した若い法律家ロバート・ガイルズは重要な地位にいたが、他の市場問題や販売問題専門家も重要な地位につけられた。

ホッジスにとっての初期の問題の一つは、商務省事業諮問委員会の件であった。この選ばれた最高級の事業幹部たちのグループは、経営者達の最終的な地位を象徴するようになっていた。だが、一般人にとってはこの委員会は企業から政府へ通ずる内側の通路のように思われたのである。議会はこの委員会の半自治的な地位を憤慨した。この状

態はホッヂスが商務長官になった時、さらに複雑なものになっていた。ヂェネラル・イレクトリックの社長・ラルフ・J・コーディナアがこの委員会の委員長をしていた。しかも、コーディナアの会社は価格を固定しようとする犯罪的な共同謀議の参加者として有罪を宣告されたばかりであった。

新商務長官は事業諮問委員会をもつと人々の同意を受け容れられるような制度に変更しようと動きはじめた。ホッヂスはこの委員会を民主化しようとして運動したけれども。この委員会が実業人たちに対して持っている特別な意味を破壊してしまわないよう注意していた。何週間にもわたって、委員会の指導者たちとの一連の微妙な議論が行われた。その結果、コーディナアは辞任した。そしてホッヂスがこの委員会の新しい司会役としてこの委員会を管轄することになってこの問題は結末となった。そして政府役員との事業諮問委員会との会合は世間に公開された。以前はこの委員会の実業人たちは、この委員会の秘密会合に出席する政府の高級官吏たちの交通費や宿泊費の支払伝票を自分で買ったものだったが、ホッヂスはこういう関係をやめるよう命令を出した。現在では連邦官吏の勘定は合衆国財務省が支払っているのである。

(七)

内閣の仕事をはじめ最初の数日間にも、彼は昔からの彼のやりかたに忠実に従っていた。彼は誰が応答するかを知るために机上のボタンを押してみた。彼は局長および局長分室の長をすべて彼のところに呼び集め、一日に十二時間費して、それまでの商務長官が要求したことがないほどの、もっとも完全な事務概要報告を聞いたのである。彼

はヘンリー・フォードやデネラル・モーターズの社長フレデリック・ドンナなどの産業界の最高の地位にある指導者たちや、連邦準備銀行局長ウィリアム・マック・マーチンを含めた政府の高級官吏たちを招待して、意見交換の場をつくりはじめた。

ホッジスは州知事の事務所を去ったその日から白いカーネーションの商標をつけなくなったけれども、貪欲なまでの宣伝意欲をそのまま維持して行った。最初に彼が思いついたことの一つは、氣象局に対して一つ一つの天気予報を商務省の生産品と同一視するよう要求することであった。ホッジスは商務省のイメージをより華やかなものにするために、正規の政府給付による高給の宣伝担当官を雇い始めた。そんなことは出来ないだろうと人々は言っていた。だがホッジスはニューヨークの大きな宣伝会社の参与ウィリアム・ルーダーに誘いの言葉をかけた。ルーダーは約一〇万ドルの収入を得ていたが、年一万六千五〇〇ドルのサラリーでワシントンにやって来たのである。

ホッジスとルーダーは協力して一般人に商務省の役割を知らせるための諸計画を練って行った。彼らが商務省に入る前にも、特許局の功績をもととして書かれた連続テレビ映画を流そうという月間計画が大いに推進されていた。

（「全世界最大のスリラー劇の一つである」とルーダーは言った）。彼らは全国に散在している三十三の商務省分局に強く人々の注意を集めようと計画したのである。そして実業人たちに、従来よりさらに増してこれらの分局を利用して貰おうと計画していたのであった。これらの分局では、当時年間九〇万からの質問を諸事業から受けていた。だがホッジスとルーダーの目標は年間二百万の質問を受けることであった。

ケネディ大統領とホッジスとの関係を評価することは難しい。表面上この二人は共通のものをほとんど持っているように思われた。一人はハーバード大学およびロンドン大学経済学部で学んだアイルランドの血をひく百万長者の

息子であり、完成された政治家であった。他方は小作農の息子であり、棉花工場に働いて苦勞してその地位をきずきあげ、ガソリン事業に投資し、従来の組織政治に嫌悪心を抱いているために注目され、知事となった人であった。この二人は本当におたがいのことをよく知らなかった。そしてホッヂスは、ケネディの身近な勸告者の一人ではなかったのである。

だがジョン・ケネディは能力を賞讃する人であり、仕事而立派に成し遂げられるのを好んだ。ケネディ・ホッヂスの関係は相互の尊敬を基礎としていた。ケネディは明瞭な表現力を持ちニュースをつくり出して行くことが出来る実業界のためのスポークスマンを、彼の側近の中に必要としていた。そしてホッヂスは当時六十三歳であり彼の精力を公共奉仕のために使える場所を必要としていたのである。充分にジョン・ケネディの父親にあたるだけの年齢であったホッヂスは、このもつとも顕著なニューフロンティア・マンから一世代はなれていた訳である。だが、その湧き立つような野心によって、行政官としてもセールスマンとしても宣伝家としても成功して来たこの男には、まだあまりにも多くの生命力があり余っていたのであり、到底ケネディ宮廷のポローニアスにはあたらぬ人物であった。「私は内閣中で一番老人であるかも知れない。だが、私はサンダーバード・カーを運転するのだ」と、ホッヂスは好んで言っていたという。

(八)

郵政長官の仕事は内閣の中でも一番重要性が少ないものと一般に考えられている。そしてこの郵政長官の椅子に座

ることになった。J・エドワード・デイという人は、詮衡された内閣の全閣僚の事で、多分もっとも人に知られていなかった人物であろう。だが郵政長官デイは郵政省に入つて来たあと、ワシントンの官界に強い印象を与えた。経済状況についての簡潔で賢明な論評は、ケネディ内閣の会合で他の閣僚たちを驚かしたのである。彼の迅速で確実な郵政問題の把握は、すぐ欠点を突つて来るような気難しい委員の多い下院歳出委員会の賞讃を得たのであった。仕事に対する彼の態度は、以前にはほとんどが面識がなかった彼の補佐官たちに強い印象を与えた。「どの人がつまずきそうであるか、どの人がうまくやつて行くだろうかと見まわす時、本当に将来性ある人物として私の眼にうつるのはデイである」と同時に高い地位にあったケネディの一補佐官は述べている。

かつてアドレイ・スタブソンの子分であったデイは、彼の親分の特徴をその頃でも沢山そのまま持っていた。彼は機智に富んでいたし、幅のひろい精神を持っていた。そして話すことにおいても書くことにおいても上手な職人であった。だが、デイはまた敏速確実な決断を下し、些細なことにも新鮮な意味を付与する人であった。いく人かの人を「実用的なスタブソンである」と言った。

デイには、簡潔で積極的なニューモア感覚があった。或る正式の会合が終つて他の閣僚たちと共にホワイトハウスの階段に立っていた時、デイは接待係からどのキャデラック・リムジンが彼のものであるか尋ねられた。「私は郵政長官であるから、私のは赤、白、青がぬつてあるよ」と彼は答えた。（彼の前任者は、全国の郵便箱やトラックをその色で塗つたが、彼の黒いキャデラックだけは、そのままにしておいたのである。）

デイは特別な記憶力と稀な表現能力を持っていた。彼は自宅で、三つの百科辞典のうちの一つを取りだして来て腰をおろし、一時間またはそれ以上読みふけることを此の上なく楽しいことと考えていたという。デイが楽しみにして

いたもう一つのこととは「ペンシルヴァニア州バックス郡のクリストファー・デイの子孫たち」という題名の、長くて詳細な彼の家族の系図を編纂し、かつ出版することであった。

彼の最初の新聞記者会見で、デイが郵政省は毎年六百五十億の郵便物を取扱うということに言及しながら「これはジュウリアス・シーザーの時以来きざまれた秒数にひとしい」と言った時、記者たちは驚かされたのであった。閣僚席についてから僅かに一ヶ月後、下院歳出委員会での証言で、デイは郵政問題についての質問にただ一つの覚書も見ずに、数時間にわたって解答したのであった。議員たちは舌をまいて驚いたのである。

(九)

ジェームズ・エドワード・デイは一九一四年十月十一日に、イリノイ州ジャクソンヴィルで生まれた。彼の父親は、祖父やその他多くの先祖たちと同様に医者であった。リンカン地方の中心地であるスプリングフィールドの気持のよい環境の中でデイは育った。それから一九三二年の景気後退の年に、シカゴ大学に入った。それは此の学校およびその総長ロバート・M・ハッチンズを有名にした大胆な教育改革新策「シカゴ・プラン」が実施されてから二年目の年であった。この計画によると学生たちは規則的なクラスの授業や試験に出なくとも、彼らが好きなようなやりかたで勉強すればよいことになっていた。判定の材料になるのは、最後に行われる一回の大量試験だけであった。学生がこの試験に合格すれば、彼がそれまでに学校に四ヶ月いようが四年いようが、或いはもつと長いようが、彼の学位を貰うことが出来るのであった。デイは卒業後、法学部で勉強を続けようと考えていたので、シカゴの学位取得前の

課程は三年間で終らせようと決心した。そして彼は決心どおりにしたのである。

一人の同級生は大学における彼は非常な人気者だったと言っている。「彼は少女たちが好きであったし、少女たちは彼が好きであった。だが彼は人気者になるよりも、彼の成績をあげようと努力することの方が重要であるという基本的な決心をかためていた。彼はよく勉強家ではなかった。だが彼は大部分の他の学生よりも時間と精力を大切にしていた。彼は講義に出席し、課せられた読書を完了し、ノートを読み、彼よりも勉強が遅れている者や助けを必要としている者に対しては誰とでもやさしく接触し、しかも自分自身は首席の生徒でいるという型の男であったのである。」

勉強と併行してデイは時間を見つけては、限られた範囲内の課外活動に参加した。かつて彼は女子学生寄宿舎への襲撃に参加したこともあった。これは今日の「パンティ・レイド」の先駆をなすものである。襲撃者が乱暴狼藉をほたらいた時、デイの良心が頭をもたげて、ほかの気持より勝って来た。それで彼は女舎監に助力を申し出て秩序の回復を手つだった。自発的に彼女を助けてくれたこの学生に、彼女は「名前は何て言うの」と尋ねた。「エドワード・デイです」と彼は答えた。その後、学校当局者がこの襲撃に参加した学生を処罰しようと決心した時、女舎監が思い出すことの出来ただ一人の名前はデイであった。彼は執行猶予付きの一学期間停学を命ぜられた。それで彼は一人の友人に次のようにこぼしたのである。「あまり優しい気持を持つと、本当にすぐに君はつかまってしまうぜ」。

ハーバード大学法学部で、彼は学問上の成績をあげることに成功した。彼は非常に成績がよかったのでハーバード法律評論の寄稿委員にえらばれた。この地位はクラスの中で学問的にもっともすぐれた学生たちのためにとっておかれるものなのである。当時軍縮問題の顧問ジョン・J・マッククロイの副官をしていたアンドリアン・フィシャーはこの法律評論のデイのノートの編者であったが、彼は「エドは頭脳明哲で非常に能率的であった」と回想している。

この法学部で一年間暮したのちの或る夏、デイはスプリングフィールドに昔からあるエイブラハム・リンカン法律事務所^{（一）}の書記として働いた。翌年の夏には彼はニューヨークのエリヒュー・ルート法律事務所^{（二）}で書記として働いた。一九三八年に彼はクム・ラウデ（優等の成績）でハーバード大学を卒業した。それから後、すぐにシンドレイ・オースチン・バーヂェスおよびハーパーの著名な法律事務所であるシカゴ法律事務所の書記として雇われた。戦雲が国全体をおおっていた一九四一年に、彼は上司の娘であるマリー・ルイーズ・バーヂェスと結婚した。この職場で彼は遺言と所有権の問題を担当したが、時々この事務所の協力者の一人であったアドレイ・E・スチブソンのために研究することもあった。

友人たちの語るところによると、デイはヨーロッパにおけるファシズム勃興の危険について屢々はげしい口調で語ったということである。ただ話すことだけに飽きてしまった彼は、一九四〇年九月に兵員募集に応じ海軍のV七計画^{（三）}に参加しようとした。だが、握手した後海軍の巡回医師はこの将来の郵政長官が「救いようのない色盲であること」を発見した。アドレイ・スチブソンは海軍省に出かけて行った。そしてデイがワシントンの海軍航空局でデスクの仕事が得られるよう助力した。（彼の課長は当時大佐のアーサー・W・ラドフォードであった）。デイは海上勤務を希望した。そしてついに彼の眼には本当は何も悪いところはないということ^{（四）}を納得させた。彼の回想するところによると四筋の階級章をつけた医者が、新しい気入りの方法でやる代りに旧式の色盲テストをしたのであった。「急ごしらえの色紙で、私はテストにパスした」とデイは言っている。

大西洋上で駆逐艦の護衛任務についていたデイは、バーソルフ街というロマンチックな小説を書いて暇な時間をつぶしていた。今では賞讃を受けているこの小説は、海軍のきままりきった勤務からの精神的逃げ場として書かれたもの

であつた。これは若くて冷笑的な性質を持った一人の医者の生活と愛情の描写であり、主人公に第一人称形式で語らせているものであつた。ウイーンの国立外科医学研究所を烈しい言い争いをしてやめてしまつた後、この小説の主人公は中西部の靴の事業家の娘と結婚する。この娘は魅力的ではあつたが彼と同じように冷笑的な性質を持っていた。妻の家族は野心の高い人たちで、そういう野心に助けられて、この若い医者は小児科の医者として繁昌した。その妻にうんざりした彼は、美しく理想的な彼女の妹に愛情を求めめる様になる。ところがその妹は彼の申出をはねつけて、二人の非嫡出子を持った母親の住むアリゾナの修道院に入ってしまう。このありそうもない小説の中に出て来るその他の人物の中には、世界国家が好きな断続的な急進主義者や、マザー・ブローアとデブシー・ローズ・リーのあいの子である知性的なカフェーのダンサーなどが出て来る。

コスモポリタン社その他いくつかの雑誌社は、このパーソルフ街の出版を拒絶した。デイはその後一九四七年にそれをフィラデルフィアのドランス社へ持つて行つた。この出版社はよく「協同出版物」を発行するところであつて、この場合には著者が費用を分担するのである。デイはこの本を出版するために約七〇〇ドルを払つた。アプル・グリンのジャケットには、渋い風景画がきわだつていた。彼はこの本の表紙の広告文を書き、その中で、彼の物語について、「人によっては、ここに表現されている思想をひどく不健全だと思ふだろう」と予告したのである。気晴しに書いたこの文学作品を自伝的なものだと誰からも思われたくないと彼は説明している。この本は一〇〇冊とは売れなかつた。著者の印税はまことに僅かなものであつて、彼が最後に受け取つた金額は、僅かに四〇セント、それも郵便切手で貰つたのである。

この小説を読んだ多くの人は素人くさい小説だと思つてゐるが、デイは著者としての誇りを持つてゐた。一時、彼

は第二番目の小説を書こうとさえ思ったのである。だが、その後パーソルフ街についての物語が新聞に掲載されると、それは共和党の議院運営委員長であるニューヨークのウイリアム・ミラー代議員の義憤を買ったのであった。この本を読んだことのないミラーは、これは「きわどい」小説だと言ひ、郵政長官である著者は彼自身かういふものを書いてゐるために、郵便物中のみだらな文書を取り締ることは出来ないだろうと言つた。小説パーソルフ街には、いくつかのおまけのシーンが出て来る。だが現代の続きもの漫画を読んでいる人なら、それを猥褻だとは全く考えないであらう。

(十)

戦後、デイはかつて勤めていたシカゴの法律事務所にもどつて働くことになつた。一九四八年にアドレイ・スチブソンは伊利ノイ州の知事に選挙された。デイは立法および法律事務についての個人的な助手としてスチブソンに協力することになり、スチブソンの親しい者たちだけでつくられてゐる非公式の「台所内閣」の一員となつた。スチブソンとその妻が離婚した後、エドとマリー・ルーズ・デイは彼らの友人たちと一緒に知事邸に幾晩も幾晩も滞在し、色々な厄介な問題に直面してゐるスチブソンを助けたのであつた。知事邸そのものがデイの事務所となつた。そして彼はアドレイ・スチブソンと屢々昼食を共にしたのである。後にスチブソンはこの若い彼の同僚について「大きな理解力とユーモアと親切さと鋭敏な精神と無限の仕事能力を持つてゐる人である」と語つた。

一九五〇年にデイは伊利ノイ州の保険局委員となつた。三十五歳で法律問題の助手から保険局委員になつたこと

は、デイの人生の一つの転換点であった。今や、彼は行政官となった。そして此の仕事において、彼はすぐれた業績を挙げたのである。そして此の新しい仕事によって彼は保険事業に入って行き、やがてそれが彼の本職となったのであった。

スプリングフィールドにいた当時に、デイは政治的な詩文作者としての名声を得た。彼のもっとも有名な詩文の一つは当時イリノイ州選出の議員をしていた州上院議員のロランド・V・リボナチが、すべての州立建築物内のすべての部屋にたんつぽを備えよという法案を州上院に提出し、これを通過せしめた時に書かれたものであった。デイは次のような詩文を書いたのである。

一つの法案が上院を通過した。

幾人かの人はまだそれについて懐疑的だ。

この法案はあまり上等でない容器に法律上の委任を与えることになろうという。

この法律を認めようとはしないこういう世間の人たちのために、私たちが指摘したいことがある。

それは良い政府はヒットであってもいけないし、ミスであってもいけないということだ。

私たちはリボナチの立法を承認せよと要求する。

一番立派な唾のはきかた。

私たちはこの法律がそういう生活態度をつくり出すものと信じている。

一九五二年にアドレイ・スチブソンが大統領に立候補した者、デイがこの選挙運動に果たした役割は、限られたものだった。彼は自分には保険委員という現職があるので、政治に指導的な役割を果すべきではないと思ったと言ってい

る。彼の最大の功績は、スチブソンが知事をしていた年間の業績についての、長い詳細な覚書を彼がつくったことであつた。この覚書は大統領候補についての沢山の雑誌記事の背景の資料として役立つ。

(十一)

一九五三年にスチブソンのイリノイ州行政が終つた後、デイは巨大なブルーデンシャル保険会社の一般事務弁護士としてやとわれた。当時ブルーデンシャルの社長をしていたカロール・シャンクスはデイを頭のよい有望な人物として抜擢し、彼を会社の重要な事務所があるニュージャージー州ニューアークの駐在員とした。シャンクスはデイを激励して、会社の事業について彼が学び得るすべてのことを学ばせようとした。そしてデイは、国中全体のブルーデンシャルの事業を視察するための一周旅行をはじめたのである。彼は種々まぢまぢの年金について、また急速に重要化したつあつた投資信託の形態についての会社内での指導的専門家となつた。一九五六年に彼はブルーデンシャルの一般顧問弁護士となつた。一九五七年には彼の迅速な出世ぶりはさらにその度を増し、ついに会社の副社長に任命されると共に、十三の西部諸州における会社事業の監査役となつた。新しい仕事のために彼は西部海岸に移動した。そこで彼は七千五〇〇人の職員と十五億ドルの投資の責任を負つたのである。烈しい利害の衝突があつて一九六〇年十二月にシャンクスが辞職し、六十八歳の副社長ルイス・R・メナグが彼に代つて社長となつたが、これは予期せざるこゝとであつた。新社長の年齢のために、デイが世界で二番目に大きい保険会社の社長になるかもしれないという噂が強まつた。

西海岸に在るブルーデンシャルの人としてのデイの民事および政治問題における活動は活発になった。彼は赤十字委員会からクレアモント大学評議員会にいたる約三〇の組織の役員となった。あまりにも熱烈であったために、或る週など五晩連続して彼は宴会に出席したと彼の助手が語っている。

カリフォルニアの民主党政治において、デイはエドマンド・G（パット）ブラウンの背後に控えていた。ブラウンは知事に選出されると、デイをいくつかの州の諮問委員会の委員に任命した。西海岸に来てから丁度一年目の一九五八年に、デイは「民主党協議会」の結成を援助した。この協議会は党のために立派な候補者を発見することに関心を持つロサンゼルスの実業界の指導者たちから成る委員会である。このグループは当時カリフォルニア州を風靡しつつあった「民主党クラブ」運動より性格においても外見においても、もっと保守的であった。デイの協議会に参加していた人たちの中にはエロジェット・デネルルの社長ダン・キンボールや石油業界の富裕な有力者エドウィン・W・ポレーなどが含まれていた。デイは選抜されて此の協議会の委員長となった。そしていくつかの他の民主党グループにおいても積極的に活躍するようになった。

一九五九年にジョン・F・ケネディはロサンゼルスを訪問したが、これは大統領候補指名獲得のための支持を求めためであった。デイは政治集会においてケネディを紹介した。それが非常によい印象をあたえたので、デイはこの上院議員をその日同じような他の五つの集会にも連れて行った。

一九六〇年二月に、デイは妻と共にイリノイ州レイク・フォレストに旅行したが、これはアドレイ・スチブンソンの誕生日の祝に行くためであった。デイのいうところによると、スチブンソンの内輪の友達だけが集まるこの集会の時に、彼はアドレイが大統領候補の指名を狙って積極的に立候補しようとする計画を持っていないことをはっきりと

知ったのであった。カリフォルニアに帰って来た時、彼はブラウン知事に対してケネディを支持するよう要請しているグループの一員となったのである。一九六〇年の初めにカリフォルニアの指導的な政治家たちが集まって、来たるべき民主党全国大会に派遣する代議員の公式名簿を作成することになったが、この時デイの立場は重要なものになった。代議員は主要な対立者グループの夫々が確実に代表されるよう選ばれた。そしてこういう状況のためにカリフォルニアは全国大会において一団となって行動するのが不可能になったのである。デイはケネディの代議員にえらばれていた。大会後、デイはカリフォルニアにおける十人構成の民主党選挙運動委員会所属の二十九人の顧問の一人として活躍した。だが彼の時間の大部分は、北部カリフォルニアの水を南部カリフォルニアに回送する資金を得るための公債の発行を一般の人たちに承諾して貰うための運動に費されたのであって、彼のこの運動は成功したのである。

ケネディが勝つとそれに引続いて、デイはR・サージエント・シュライバーや、その他のケネディ派の最高幹部の人たちから、重要な役職に任命を予想される人について相談を受けた。彼らはデイに、彼自身東部に来てニューヨークに参加するつもりがあるかどうか尋ねた。だがその時の返事は「そういうことはありそうもない」というものであった。一方、ワシントンに於てはケネディの補佐官たちが、閣内のどれかの地位をカリフォルニア勢力の人に割りあてたいと思つて、カリフォルニアに注意を向けていたのであった。以前にブラウン知事の行政補佐官をしていたことがあり、ケネディの全国選挙運動要員の一人であったフレッド・ダットンは、第二番目に大きなこの州に政治的橋頭堡をきざすことは、一九六四年の政権にとって有利であろう。特にニューヨークのネルソン・ロックフェラー知事がGOP（共和党）の大統領候補になる場合には、そうであろうということを強調した覚書を回付した。この覚書は非常に有効であった。そして一九六一年のはじめにもう一つの政治的文書が最高幹部の政府要員に回覧された時

には、この文書はカルフォルニアが単なる任命地位の分前を受ける以上の重要な州であることに、警告を発する意義をもったのである。

（十二）

現在では公式に否定されているけれども、閣僚が詮衡されていた当時には、郵政長官の地位は南部カリフォルニア人のものになるだろうという噂が流れた。まず最初に予想されたのは州上院議員であるサンデゴのヒューゴー・フィシャーであったが、カリフォルニア民主党内部の人たちの間で彼に対する反対が持ちあがった。それから、ワシントンにおける「人物探求」線上にデイが浮びあがって来たのである。

郵政長官を探していた過程における一つの奇妙な面は、シカゴのニグロの指導者であるウイリアム・L・ドーソン下院議員に、郵政長官就任への「申し出」がなされたということであり、それが人々に知れ渡ったということであった。ドーソンについての挿話については、これだけのことがわかっている。彼の名前がはやくから予想される郵政長官の候補者として報道記者たちに洩れたのは、彼の古くからの政治的な友であり副大統領選出候補でもあるリンドン・B・ジョンソンからであった。大統領内閣の一員として初めてニグロを任命するという考えは、多くの興味をひいたのである。実際にはドーソンのシカゴの組織内での政治的な醜聞があつて、彼が選ばれることは最初からありそうもなかったのである。十二月のはじめに、ドーソンが任命されるぞという間違えた報道が新しい波となってワシントンから入って来ると、この噂の焰はさらに勢よく燃えたのであった。こういう事態の進展に大統領選出候補はいらだ

った。大統領がこのことを特に苛立たしく思ったのは、彼が政府内の高い地位に適当なニグロを採用しようと本当に努力していたからである。だが旧式のニグロの政治機関の年老いた指導者であるドーソンは、彼が探している型の人物ではなかった。今日でもケネディ政権の高級幹部たちは、大統領候補が発表したというドーソンへの郵政長官就任要請の話について、ドーソンが就任しようとはしなかったという話についてと同様、固く口をとざしているのである。ほとんどすべての閣員の詮衡に關係して来たケネディの正規の「人物探求」組織は、ドーソンにそういう申出がなされたということについて、ケネディが世間にそれを発表するまでは、何も知らなかったのであった。

一九六〇年十二月十五日、デイはロサンゼルスビルチモア・ホテルで開かれていた保険業者のカクテルパーティーに出席していた。午後四時頃（ワシントンでは午後七時）彼に電話がかかって来た。彼の秘書は大統領選出候補ケネディが彼との会話を欲していると告げた。ワシントンの「交換手六〇」を呼び出すよう告げられたのをデイは記憶している。ホテルの電話ボックスに腰をおろして、デイはケネディの私設秘書エヴリン・リンカン夫人に連絡した。リンカン夫人は、ケネディは前階段で農務長官の任命発表をしており忙がしいので、待っていて貰いたいとデイに言った。電話ボックスで二〇分間待たされた時、ケネディからの電話がかかって来た。ケネディは彼に郵政長官就任を要請したのである。彼にはまったく再考の余地はなく、その瞬間受諾の決意をしたとデイは言っている。ケネディはデイに飛行機でその晩ワシントンに来てくれるよう求めた。デイは妻に電話をかけてその事を知らせると共に、このことを秘密にしておくようにと言った。それから彼はブルーデンシャルの社長カール・シャンクスに電話をかけたが、彼はそのことを「喜んだ」。来たるべき任命について注意深く秘密をまもっていたデイは、旅の荷をまとめている時にロサンゼルスからの電話で驚かされた。その新聞記者は、既に話の全部を知っていたのである。

翌朝デイがバルチモアのフレンドシップ空港に到着すると、新聞協会の報道写真記者団が彼を待っていた。噂されている任命について語ることをデイは拒否したが、「郵政問題についての多くの意見を彼らに述べた」ことをデイは記憶している。ケネディと飛行機に同乗したデイは、ワシントンからバームビーチの休暇用邸宅に向った。そしてこの途中デイは彼の新しい頭領とはじめて長時間話し合う機会を持ったのであった。十二月十七日、ケネディは他の多くのニューフロンティアアマンを報道記者たちに紹介したスペイン風の内庭で、デイの任命を発表した。背の低い、やや固苦しい感じのするデイの詮衡によってケネディ内閣は完成したのである。

(十三)

彼の問題を整理するためにデイはカリフォルニアの自宅に帰った。いつも郵便物をデイの家に配達して来るマーヴィン・ジョンソンというニグロの郵便屋は、非常に得意になってこの郵政長官になった人を地区郵便局までひっぱり行って、ほかのすべての配達夫に会わせただけであった。郵政長官に示したジョンソンの個人的関心は、この誇らしい瞬間で終わってしまった訳ではなかった。デイが郵政省の長官になってから数週間後、まだロサンゼルスのある学校に通っている十四歳の彼の娘モリーが、郵便で一寸した短い手紙を父親のところへ書きおくれた。封筒の外側に彼女は書いた。「郵便屋さん郵便屋さん、あなたの任務を果して下さい。この手紙を私のキューティーの所へ届けて下さい。」。忠実な郵便屋はそれに次のように付け加えた。「かしこまりました。それは今、送られています。マーヴィン」。郵政長官はこの封筒を記念としてワシントンの郵政省本部の机の中にしまい込んだ。

長官室に入って行った時の彼の立場は、彼が州の保険委員になった時の立場と大いに類似していた。彼に課せられた仕事の詳細について、彼は殆んど、あるいはまったく、何も知らなかった。だがすぐに彼は二つの非常に異なった出所からそれらのことを学びはじめたのである。

まず第一の出所は上院で長い間郵政および公務員委員会付職員の長をしていたH・W・(ビル)ブローリーであった。ブローリーは選挙戦中ケネディ本部でリンドン・ジョンソンとの連絡員として働いていた。そして選挙後はケネディが郵政長官になりそうな人物を探すのを手伝ったのであった。ケネディはデイを郵政事務の最高責任者に任命するのを発表すると同時に、郵政副長官にブローリーを任命することを発表した。郵政問題についての民主党議員の最高幹部たちの補助役をしていたブローリーは、郵政省を管理するための多くの法律案を起草して来た。新政権がすべり出すまでの過渡期間デイと彼の副官はブローリーの上院事務所と一緒に仕事をしていたのである。

郵政問題についてのデイの勉強に資料を与えたもう一つの出所は、現職の郵政長官アーサー・E・サマーフィールドであった。一連のサマーフィールドとの会談によってデイは啓蒙された。そしてそれによってサマーフィールドについて多くのことを知ったし、郵政事務の状況について幾つかの驚くべき事実を知ったのである。パーム・ビーチでの発表が行なわれた後、サマーフィールドはロサンゼルスにいるデイに電話をかけた。簡単な祝の言葉を述べた後、サマーフィールドはデイに対し、彼が使っていた秘書をその儘つかけてくれるよう頼んだ。その秘書はサマーフィールドが共和党の全国委員長であった時からの秘書であった。デイはこの要求を非常に普通の慣例とちがった要求であると考えたが、その秘書については「面倒を見る」ことを約束した。政権の過渡期間中このほかに何回もサマーフィールドはデイを説得して、この女秘書にそのまま仕事を続けさせようと努力した。郵政長官になってから、デイは長官

秘書は文官勤務規則によって拘束されており、簡単に解雇出来ないことを知ったのであった。彼はまたその婦人の夫や兄や妹がやはり郵政省に雇われていることを知ったのである。その秘書は移動させられて別の課で仕事を持つことになった。そして親戚たちも文官勤務規則に従ってその盛職にとどまったのである。

郵政省から出て行く幹部たちと郵政省に入って来る幹部たちの間には、就任式に先立つ過渡期間、実質的な協力力はほとんど行われなかった。デイやブローリーやその他の来たるべき最高幹部たちがサマーフィールドに会いに行くたびに、サマーフィールドは彼らに心から挨拶した。そしてそれから、記念スタンプやその他これ類似した事柄についての彼の計画を示す短編映画をえらんでみせてくれた。デイが長官になって最初にとった公式行動の一つは、サマーフィールドがその中で主役を演じ、そして郵政省とその指導者についての他の宣伝をも兼ねた事業意欲促進のための映画に、サマーフィールドが掛けていた相当巨額の費用を大幅に削減することであった。

前海軍中尉にとってのもう一つの驚きは、郵政職員が彼の新しい肩書に対してとる厳肅な態度であった。ほとんどすべての職員が彼を長官と呼んだ。そしてデイがニューヨークシティの郵便局へ視察旅行に行った時には、郵便局の守衛はびしっと音を立てて不動の姿勢をとり彼に敬礼したのであった。デイは郵政省の下僚と会った場合の形式主義をへらそうとして「エド」あるいはせいぜい「デイさん」位のもっと民主的な挨拶をするより提案したが、彼のこの試みは失敗した。郵政職員たちは非常に驚いたようであった。そして、デイは彼のたたかいを諦めたのであった。長官という肩書は、百年以上にわたって郵政省の文官たちによって厳肅なものと考えられて来たのだということに、彼は気がついたのである。

新しい地位を得たことによってデイは、政府の高級官吏に迎合しようとするワシントンの社交的集合で、歓迎され

る客となった。大統領の就任式が行われる数日前に、デイはその名前をまったく聞いたことがないワシントンの一人のホステスから晩餐会への招待を受けた。補佐官たちもその婦人が誰であるか見わけがつかなかった。ついに上院の一人の職員が、この不思議な招待状の送者について調査するよう依頼された。彼は彼女の夫についての詳細な信用調査報告をつくって来た。だがデイがそのパーティーに出席すべきか否かについては、何の情報も得られなかったのである。彼はようやく時間に間にあつて次のことを発見した。すなわち大統領就任式の晩にジェイン・ウイーラー夫人によって主催された晩餐会は、新大統領自身によって認可されたもので、大統領および彼の閣僚のための「公式」のものであったのである。

郵政長官は比較的知られざる人としてワシントンにやつて来たために、ひきつづいて色々な問題に直面した。下院議長サム・レイバーンは、当初の或る社交的会合でデイを用心棒だと間違えて、「公式のパーティー」なのだから手伝つて道をきれいにしたまえと命令した。デイがこの国の首府に入つてから最初の数週間にニューヨーク・タイムズの雑誌篇に或る論文を書いた時、そそかしい編集者は彼の写真の説明に「小都會の新人—J・クラレンス・デイ。知られていることのもっとも少ない閣員」と書いた。彼がほとんどまったく知られていないために、ニューヨーク・タイムズの編集者が、彼らの客員執筆者の名前さえ覚えていないことにデイはむっとした。

比較的小さな困難は別として、デイは郵政省が「大体において相当うまく行っている」と思った。彼は多くのことを変更しなければならぬことに気づいたが、大きな危険には会わなかった。彼が直面した継続的困難の最大のものは郵政事務運営費にみられる年額八億ドルから九億ドルにのぼる赤字であった。植民地時代から今日にいたるまで、郵政省はそれが収入として受けるよりも、より多くの金額をつかつてしまったことが多かった。デイは郵政省をもつ

と自給自足に近いものにしたという希望をもった。そしてそれをするための唯一の方法は、郵便料金の値上げであると彼は考えたのである。

郵政長官は常に政府全部門にわたる政治的特権の分配者として重要な存在であった。郵政長官の広大な事務所のすぐ外側の廊下には、当時でも空いたベンチや椅子がずっと並んでいた。そしてそこには、かつて恩恵を求める人たちが多勢腰をおろしていたのである。政権発足当初にケネディは、政治的地位の付与は第一に民主党全国委員会や数人の重要なホワイトハウスの補佐官が取扱うべきもので、郵政長官のすることではないということを決めた。「他の諸省内の政治的特権にからまる問題について私が役割を持っていると思われないことは嬉しい」とケネディは述べた。

だが、郵政省自身の内部にも、何らかの政治運動の余地は充分にあった。文官勤務規則によって従来の郵政省職員をそのままの地位に「とじこめておこう」とする共和党の企てにもかかわらず、巨大なこの省の中に多くの空白の地位が生じていた。当時の記録によれば毎年三万の仕事が新しく人の来るのを待っていたといわれている。そのうち約二千五百が郵便局長の仕事であり、また同数の田舎道の郵便配達人の仕事があった。これらは地方の政党組織にとつての伝統的な政治的閑職なのである。さらに、郵政省は数百万ドルの公金を、選択した地方銀行に預けていたし、また別の二億ドルを毎年建築業者との契約に支払っていたのである。

郵政省職員を集めてのはじめての訓話の中で、ケネディは彼自身の管轄省の基本方針を述べた。「新しく仕事についた人も、経験ある人たちも、この省の人たちすべてに望みたいことは、敏速、明快、熱意、精力を仕事の基調として貰いたいということです。時には我々がユーモア感覚を持っていることを示すためにも、一寸したひらめきを見せることは、良いことだろうと思う」。この言葉ほど郵政長官自身を要約しているものはなかった。